

朝日旧友会定時総会



挨拶する中江会長

左から大野、徳江両副会長、木村社長、飯田東京代表

朝日旧友会報

朝日旧友会

東京都中央区築地五―三―二

朝日新聞東京本社内

TEL 104-8011

FAX 三三五五〇一〇二二

三三五四三―三三三八

和気あいあい 定時総会開く

懐かしの仲間 元気に再会

東京朝日旧友会の平成二十六年定時総会は、五月十五日(木)午後四時から有楽町マリオン朝日ホールで開かれた。あいにくの雨模様で出足が心配されたが、朝日人として苦楽を共にした昔の仲間と再会できるとあって、午後一時半からの映画「探偵はBARにいる2」の上映前には約百六十人が詰めかけ「やあ、しばらく、元気でよかった」と肩を抱き、手をにぎり合う場面もあった。

総会では中江利忠会長、徳江景英、大野功雄両副会長はじめ旧友会員二百三十人、本社側から木村伊量社長、飯田真也東京代表ら役員、幹部ら四十五人が出席、盛大な交流が行われた。

自画自賛、拙速で粗雑な政策に警鐘 中江会長

前途多難だがトップの朝日守り抜く 木村社長

総会では森精一郎事務局長の司会で開会、最初「列強志向の安倍「ナルシズム」と題して

初に中江会長が「『み

自画自賛の自己陶醉、

平成二十七年定時総会日程

〔日時〕 新年総会 一月十五日(木)

定時総会 五月二十一日(木)

〔場所〕 朝日新聞記念会館(有楽町マリオン11階)

拙速で粗雑な政策ばかりが目立つ」と安倍内閣に警鐘を鳴らした。

次いで森司会者がこの一年にご逝去された会員五十七人のお名前を拝読、出席者全員で黙祷を捧げた。続いて森下会計幹事から平成二十五年年度の決算報告があり、拍手で承認された。

来賓として出席の木村社長は「過去に例のない厳しさの中、前途は多難だが、全身全霊をかけてトップジャーナリズムの朝日を守り抜く、消費税の荒波にも負けない覚悟」と決意を語った。

引き続き懇親会、タル酒が開けられ、ホール全体がなごやかな語らいの場となった。午後七時半名残を惜しみ、次の再会を約束して帰路についた。皆様お元気で、またお会いしましょう。

「みなはらから」に目覚めよ 列強志向の安倍ナルシズム

何よりも安倍首相が、過半数を維持する内閣支持率に気を良くしてか、自画自賛のナルシズムの世界に入り、あらゆる政策にわたって性急、拙速で複雑な姿が目立って来ています。

第一次内閣以来の悲願である「戦後レジームからの脱却」の中核、憲法九条の改正は長期政権を目標に段階的に進めることにし、まず憲法解釈の変更として集団的自衛権の行使容認を政府の采配で乗り切る戦術に切り換えました。そして五月十五日、首相の私的諮問機関「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」（安保法制懇）が報告書を提出、これを受けて安倍首相が政府の「基本的方向性」を発表しますが、行使条件の歯止めが曖昧なままで、権力を縛る立憲主義が安全保障を理由に骨抜きにされようとしています。

安倍首相はこの四月、自身が外国で演説した原稿を集成した「日本の決意」という本を出版しています。その冒頭には、就任早々ワシントンでの日米首脳会談直後の昨年二月、CSIS（米戦略国際問題研究所）で行った政策スピーチの全文を掲げ、「日本は今も、これからも、二級国家にはなりません」と謳

いました。しかしその後の安倍首相は、昨年暮れの靖国神社参拝強行の後も内外の批判には馬耳東風、今春の例大祭では参拝を見送ったものの真神奉納は続け、閣僚ら党内外の集団参拝に道を付ける形になっています。

昭和天皇の靖国の「うれひ」そんな中四月三十日付朝日新聞の「文芸時評」欄に、出版されたばかりの平山周吉著「昭和天皇「よもの海」の謎」という本が紹介されました。

太平洋戦争が始まる三カ月前、昭和十六年九月六日の御前会議が①米英との戦争の準備を完成する②並行して外交の手段を尽くす③日本の要求が貫徹できない場合は開戦を決定する、という「帝国国策遂行要領」を決定する際、昭和天皇が日露戦争開戦時の明治天皇の御製「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風たちさざわぐらむ」を読み上げて戦争回避を期待したの

に、軍部は歌人・佐佐木信綱の解釈を基に、起こした波風はなるべく早く収めたい、と開戦に走ってしまった、というのが平山氏の謎解きです。

さらに昭和天皇が崩御三年前、昭和六十一年の終戦記念日に「こ

の年のこの日にもまた靖国のみやしろのことにうれひはふかし」との御製を詠まれたことが、特記されています。靖国神社の宮司がA級戦犯を勝手に合祀したことが明るみに出て、これに怒った昭和天皇が「あれ以来、参拝してはいない。それが私の心

毎年終戦記念日のたびに靖国問題で襲われる深い「うれひ」を反芻しておられたこと、そして後継の平成天皇もこれに倣っている事実を、安倍総理はどう見ているのでしょうか。

参拝を強行しておいて直後の記者会見で「中国、韓国の人々の気持ちを傷つけるつもりは全くありません」と言っているの

が、その指名騒ぎの最中、伊東氏が思いきり吐露した当時オフレコの話が収録されていますが、「政治家とカネの問題は政治家同士の間で通用しても、世間には全く通用しない。一般国民には感覚というものが、政治家には失われている」と慨嘆したく

りがあります。国正さんは、会津人らしく愚直なまでに「廉恥心の人」、ハト派だった伊東さんを惜しみ、そのような人材が失われてしまった現在の政権の強硬姿勢を取り上げ、「決める政治」を目指した結果、「国家主義」に突き進もうとしている」と警鐘を鳴らしました。

それにしても、かつて自民党のハト派集団とも良心派ともいわれ、大平正芳、宮沢喜一、河野洋平といった首相や総裁も生んだ「宏池会」が、いまや安倍政権に完全に取込まれてしまった現実を、嘆かずにはいられません。

谷垣禎一・前総裁は法相に、宏池会会長の岸田外相のほか小野寺防衛相、林農水相、根本復興相を加えた五人までが閣僚です。慎重な姿勢を保ってはいる

ものの取り込まれかねない与党の公明党の動きと共に、監視を怠るわけにはいきません。日本の侵略と植民地支配を反省し詫びた「村山談話」や、従軍慰安婦に強制力を認めた「河野談話」を反古にしようとしていた総理

も、澎湃（ほうはい）たる批判を前に両談話を踏襲する考えを表明せざるを得なくなりましたが、こうした政策の是正に果たす役割と責任が、メディア全般にも一層重くかかって来ていることも、再認識したいと思っています。

最後に、前回の時点ではまだ出ていなかったメディアの統計数字を取り上げます。二〇〇九年の広告費総額に占める新聞広告のシェアがインターネット広告に初めて追い抜かれた後、昨年は新聞が一〇・三％に対しインターネットが一五・七％とさらに大きく水をあけられてしまいました。予想されたことですが、メディアの構造変化に対応した新聞社の抜本的な改革が眉の急になっていきます。

木村社長は年頭メッセージと四月の入社式あいさつで「未来メディア・プロジェクト」に一層果敢に挑戦することを表明しました。私たち旧友も現役の皆さんの奮闘に期待しながら、ジャーナリズムの最後の砦、朝日新聞の発展と日本の政治の改革のために共に頑張ってください。



中江旧友会会長あいさつ

だ」と述べた言葉を富田朝彦（ともひろ）宮内庁長官のメモとして日経がスクープしたことは、記憶に新しいところです。

昭和天皇は昭和五十年秋の初めての訪米直後まで戦前・戦中三十三回、戦後八回に及んだ靖国神社参拝を、終戦直後に詠んだ「身はいかにもなるともい

とどめけり ただたふれゆく民をおもひて」の歌をベースとしてA級戦犯合祀を契機に断腸の思いで中止しましたが、その後、

や、「よもの海みなはらから」、二十一世紀の言葉で言えば「共生」の思想は持ち合わせていない、と思わざるを得ません。

折から元政治部編集委員の国正武重さんが「伊東正義 総理のイスを蹴飛ばした男」という本を没後二十年の最近、世に問

元編集委員の「伊東正義論」

した時の首相臨時代理を一月余り務め、その後外相、自民党の政調・総務両会長を務めていた彼は指名を固辞して党の政治改革本部長で奮闘したあと引退八十歳で二十年前に亡くなりました。

その指名騒ぎの最中、伊東氏が思いきり吐露した当時オフレコの話が収録されていますが、「政治家とカネの問題は政治家同士の間で通用しても、世間には全く通用しない。一般国民には感覚というものが、政治家には失われている」と慨嘆したく

りがあります。国正さんは、会津人らしく愚直なまでに「廉恥心の人」、ハト派だった伊東さんを惜しみ、そのような人材が失われてしまった現在の政権の強硬姿勢を取り上げ、「決める政治」を目指した結果、「国家主義」に突き進もうとしている」と警鐘を鳴らしました。

それにしても、かつて自民党のハト派集団とも良心派ともいわれ、大平正芳、宮沢喜一、河野洋平といった首相や総裁も生んだ「宏池会」が、いまや安倍政権に完全に取込まれてしまった現実を、嘆かずにはいられません。

谷垣禎一・前総裁は法相に、宏池会会長の岸田外相のほか小野寺防衛相、林農水相、根本復興相を加えた五人までが閣僚です。慎重な姿勢を保ってはいる

ものの取り込まれかねない与党の公明党の動きと共に、監視を怠るわけにはいきません。日本の侵略と植民地支配を反省し詫びた「村山談話」や、従軍慰安婦に強制力を認めた「河野談話」を反古にしようとしていた総理

も、澎湃（ほうはい）たる批判を前に両談話を踏襲する考えを表明せざるを得なくなりましたが、こうした政策の是正に果たす役割と責任が、メディア全般にも一層重くかかって来ていることも、再認識したいと思っています。

最後に、前回の時点ではまだ出ていなかったメディアの統計数字を取り上げます。二〇〇九年の広告費総額に占める新聞広告のシェアがインターネット広告に初めて追い抜かれた後、昨年は新聞が一〇・三％に対しインターネットが一五・七％とさらに大きく水をあけられてしまいました。予想されたことですが、メディアの構造変化に対応した新聞社の抜本的な改革が眉の急になっていきます。

木村社長は年頭メッセージと四月の入社式あいさつで「未来メディア・プロジェクト」に一層果敢に挑戦することを表明しました。私たち旧友も現役の皆さんの奮闘に期待しながら、ジャーナリズムの最後の砦、朝日新聞の発展と日本の政治の改革のために共に頑張ってください。

元編集委員の「伊東正義論」

折から元政治部編集委員の国正武重さんが「伊東正義 総理のイスを蹴飛ばした男」という本を没後二十年の最近、世に問

本を没後二十年の最近、世に問

世に問

問

社長あいさつ



社業報告する木村社長

消費税増税対策を打ったこと、さらに思い切った予備紙の整理を柱とする販売の構造改革に本格的に着手したことが大きな理由であります。

いまの朝刊の部数は約七百五十万部弱、夕刊は約二百七十万部です。四月からの消費税増税にあたっては、増税分を購読料に転嫁して読者にご負担をお願いいたしました。本体価格の値上げでなくとも、セット版の価格が四千円台にのることで購読をやめる人がたくさん出てくるのではないかと身構えていたところ、いまのところ、販売局を中

手を打っておく必要があります。いま、身を切る覚悟で構造改革に挑まずに、朝日新聞の明日はないと私は考えています。

このところの紙面について、私の感じるところをお話ししたいと思います。朝日新聞は昨年福島原発事故をめぐる一連の「手抜き除染」の報道で新聞協会賞を受賞しました。「プロメテウスの罠」での受賞に続き、二年連続です。さらに、猪瀬東京都知事の辞職、それに連なる洲会側から五千万円の供与があったことを朝日新聞がスクープ

とりわけネットの空間には、首相をたたえ、返す刀で朝日新聞をはじめとするリベラルなメディアを激しい言葉で中傷する意見があふれています。「反知性主義」というべきか、物事を深く、落ち着いて考えようとはせず、敵か、それとも味方かという単純な視点でしか見られない、うすっぺらな社会のありように、私は強い危惧を抱いています。

来年は戦後七十年、日韓基本条約締結五十年と大きな節目を迎える年です。こういうときこそ、朝日新聞は、正確な情報と深い洞察を交えた高い品質の記事をたくさん載せていくことで、社会の公共財としての役割を果たしているかなければならないと心しているところです。

これらの紙面改革は、販売部門が進める読者対策と強く呼応させたものになっています。「消費税戦争」のまった中で苦闘を続ける新聞販売現場、ASAへの深い理解をもとに、報道部門もスクラムをくみ、周到に準備した成果です。新聞を取り巻く環境は誠に厳しい。しかし、まだまだ工夫の余地があり、その工夫の先に読者のみなさんのさらなる満足がある。読者、ユザー！第一主義をかげ、全社で奮闘しているところです。

朝日新聞は今年一月に創刊から百三十五周年を迎えました。幾度となく大波を乗り越えながら、この看板を守ってきた先人や先輩を前に申し上げにくいことではありますが、新聞業界を取り巻く環境のなかで、朝日新聞は過去に例のない厳しさのなかにあると実感しています。しかしながら、悲観することは全くありません。なんととしても、この国に欠かせないトップジャーナリズムとしての朝日新聞を守り抜く。そこに全身全霊をかけて取り組んでまいります。

身を切る覚悟で挑戦 聖域なき構造改革 紙面刷新で、朝日の存在確立

私が社長を拝命いたしました二年になります。この一年間は、四月の消費増税への影響をなんとか最小限に抑えよう、さらに、激変するメディア状況のなかで、朝日新聞というトップジャーナリズムを守り、未来につなぐべく、いくための「聖域なき構造改革」に取り組もう、ということと走り続けてまいりました。おかげさまで、現役のみなさんの奮闘、OBのみなさまのご支援のもと、なんとか改革は前に進んでおります。

痛み伴う改革刷新

OBのみなさまに真っ先に御礼を申し上げます。これは、年金の段階的引き下げ実現についてです。構造改革の一環として、本社は昨年、OBのみなさまのうち五・五%の給付利率で年金を受給している約二千三百人の方向に段階的な給付利率の引き下げへのご協力をお願い申し上げました。多くの方から、安定した年金制度を維持していく、そし

て朝日新聞のジャーナリズム活動を末永く守っていくという改革目的へのご理解をいただきまして、今年二月から利率の引き下げを実現することとができました。今後、二年ごとに

〇・五ポイントずつ、四回に分けて徐々に給付利率を下げ、六年後の二〇二〇年二月には他のOB・現役と同様、三・五%の利率で統一されることになりました。経営陣を代表して、心からの感謝を申し上げます。経営状況についてご説明をさせていただきます。二〇一三年度の最終決算は、前年十二年度の本社営業利益六十四億円は及びませんが、五十億円台は確保できる見通しとなっております。前年比マイナスの経営基盤強化を柱に、考える限りの

心に周到に準備したこともあって購読を中止した読者は想定をかなり下回っている、ひとまず胸をなでおろしているところで

す。しかし、来年十月には消費税が10%上がることが予定されており、ここであらゆる油断せず、構造改革に突き進みたいと考えています。見通しうる将来に紙の新聞が消えてなくなることはないでしょう。しかし、部数減には容易なことでは歯止めはかかりません。この大きな趨勢を直視して、デジタル部門の進化や新たな投資など、いまからできる限りの

したことがきっかけでした。敵か味方かの単純な社会に危惧を覚悟、さらには現下の集団的自衛権をめぐる議論のなかで、安倍政権の「体質」が浮き彫りになっていきます。戦争犠牲者の霊を慰めること自体にはむろん異論はありませんが、A級戦犯が合祀された靖国神社に近隣諸国や世界がどのように受け止めるかの想像を怠り、自らの「信条」をすべてに優先して参拝する道を選んだのには、私個人としても賛成できません。しかし、

消費増税を前に、三月末から紙面を刷新しました。シニアや子育て世代の女性にターゲットを絞った読み物を、というのが今回の紙面改革のコンセプトです。OBのみなさまには、特にお楽しみいただけているのではないのでしょうか。定年後の資産設計、シニア時代の婚活などをテーマにした「Reライフ人生充実」、夏の甲子園大会で語り継がれる名勝負「箕島一星稜」戦から始まった「あの夏シリーズ」など、読み応えがあり、朝日新聞のコア読者の期待や、くらしのニーズにこたえる力作ぞろいだと自負しております。

守り抜くトップ朝日の看板

消費増税を前に、三月末から紙面を刷新しました。シニアや子育て世代の女性にターゲットを絞った読み物を、というのが今回の紙面改革のコンセプトです。OBのみなさまには、特にお楽しみいただけているのではないのでしょうか。定年後の資産設計、シニア時代の婚活などをテーマにした「Reライフ人生充実」、夏の甲子園大会で語り継がれる名勝負「箕島一星稜」戦から始まった「あの夏シリーズ」など、読み応えがあり、朝日新聞のコア読者の期待や、くらしのニーズにこたえる力作ぞろいだと自負しております。

これらの紙面改革は、販売部門が進める読者対策と強く呼応させたものになっています。「消費税戦争」のまった中で苦闘を続ける新聞販売現場、ASAへの深い理解をもとに、報道部門もスクラムをくみ、周到に準備した成果です。新聞を取り巻く環境は誠に厳しい。しかし、まだまだ工夫の余地があり、その工夫の先に読者のみなさんのさらなる満足がある。読者、ユザー！第一主義をかげ、全社で奮闘しているところです。朝日新聞は今年一月に創刊から百三十五周年を迎えました。幾度となく大波を乗り越えながら、この看板を守ってきた先人や先輩を前に申し上げにくいことではありますが、新聞業界を取り巻く環境のなかで、朝日新聞は過去に例のない厳しさのなかにあると実感しています。しかしながら、悲観することは全くありません。なんととしても、この国に欠かせないトップジャーナリズムとしての朝日新聞を守り抜く。そこに全身全霊をかけて取り組んでまいります。まもなく暑い夏がやってきます。今年の夏の甲子園大会は九十六回、四年後には百回大会の節目を迎えます。ご体調を崩されることなく元気で健やかに過ごしたいです。OBのみなさま方とご家族お一人お一人の健康を心からお祈り申し上げます。

平成26年 定時総会出席者

会員出席者

- (あ) 荒木忠直 青山 勇
- 秋庭 武美 秋山 康男
- 麻田 幸佑 阿部 征夫
- 天野 重夫 荒井 利尚
- 栗田伊三雄 栗田房穂
- 安藤 保雄 秋山耿太郎
- 沓岐 健志 池田 正勝
- 池辺 史生 石岡 統明
- 石川喜代司 市川 健
- 伊藤 裕造 乾 雄成
- 岩井 章 岩松 宰正
- 池内 文雄
- (う) 植木 栄 上田 久行
- 宇野 勝己 梅澤 正治
- 江上 博隆
- (お) 大野 功雄 大坪 正徳
- 大島 吉美 大塚 一郎
- 大原 広哉 岡田 和巳
- 岡田 肇 岡部 匡克
- 奥田 信久 小田川 興
- 小野寺忠志 小栗 昌宏
- 片岡 久明 香月 浩之
- 加藤 次一 加藤 光雄
- 加藤 嘉照 金井 進
- 叶内 均 金成 英雄
- 加納 隆 加納 安實
- 蒲田浩三郎 神谷 光男
- 亀本 泰夫 川島 正治
- (い) 川島 正英 川瀬 智長
- 川戸 弘次 粕谷 卓志
- 川辺 久信 川又 健一
- 金子 晃二
- (き) 菊池 武 喜久村 繁
- 岸田 隆秀 清時 竹彦
- 工藤 叶二 国正 武重
- 久保田 泉 窪田 康孝
- 熊澤 誠 栗原 姿哉
- 黒川ハジメ
- (こ) 高口 信行 桑折 勇一
- 小杉 弘 後藤 襄
- 後藤 清光 小林基美男
- 小林三千夫 小松 季司
- 小松崎康次 小松 直
- 五味 秀雄 込山 光雄
- 小山 千宏
- (さ) 坂井 清保 斎藤 善男
- 佐藤 清治 笹井 輝雄
- 佐々木博志 沢野 正明
- 芝 實 柴 昭二
- 柴田 瑠一 柴田 眞樹
- 島崎 兵助 清水 勝
- 志村嘉一郎 志村 勇
- 下村 満子 杉谷 隆司
- 数度 富夫 杉谷 徹
- 鈴木 益民 須田 徹
- 須田 博敏 須藤 典政
- 田中右太生 竹内 實昭
- (た) 高橋 勝行 高山 修一
- 滝下 修 竹田 純
- 竹村 文雄 田中 源一
- 田辺 功 谷口富喜男
- 角田 昌和 土田 芳孝
- 鶴谷 守男 寺田 眞文
- 寺田 達雄 寺田 眞文
- 徳江 景英 東 常道
- 都丸 司 豊田 明
- 中江 利忠 中島 泰
- 名倉 正昌 中島 富次
- 内藤 頼誼 中北 宏八
- 中澤 勝巳 中島 清成
- 永田 芳男 中野義次正
- 中村 雅俊
- 蛭川 真夫
- (ち) 根津 静男
- 野村 彰男 長谷川敏郎
- 箱島 信一 初山 有恒
- 服部 豊男 花井 尊
- 羽鳥健一郎 浜田 隆
- 羽生 弘 林 常蔵
- 林 荘祐 菱沼 保幸
- 菱沼 幸次 菱沼 義男
- 榎山 隆 平賀 新介
- 比留間悦雄 平野 新介
- 藤巻 隆 福田 孝生
- 福田喜大 藤島啓之介
- 別府 次郎
- (て) 高橋 勝行 高山 修一
- 竹田 純
- 田中 源一
- 谷口富喜男
- 土田 芳孝
- 寺田 眞文
- 東 常道
- 中島 泰
- 中北 宏八
- 中野義次正
- 中島 清成
- 中村 雅俊
- 蛭川 真夫
- 根津 静男
- 野村 彰男
- 箱島 信一
- 初山 有恒
- 花井 尊
- 浜田 隆
- 林 常蔵
- 菱沼 保幸
- 平賀 新介
- 平野 新介
- 福田 孝生
- 藤島啓之介
- 別府 次郎
- (と) 堀越 富榮 細川 淳一
- 堀野 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (ま) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (め) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (み) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (む) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (ま) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (め) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (み) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (ま) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (め) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男
- (み) 星野 富榮 細川 淳一
- 堀越 作治 洞口 和夫
- 堀野 昭正 前原 寛成
- 松野 信彦 増永 信夫
- 松功 松井 茂
- 松岡 秀雄 松本 仁一
- 松本 精次 松本 秀男
- 水木 初彦 三浦 義晴
- 三野 孝文 宮内 繁
- 三宅 勝喜 宮坂 秀一
- 宮崎 仁一 宮崎 千勝
- 宮澤 恭人 宮田 善光
- 村野 坦 村岡美佐男
- 村上 吉男 村上 紀子
- 村田 順一 宗田 文隆
- 森 精一郎 森下 昇
- 諸 寿子 森 修二
- 森田 恭生
- 山越 英一 山村 行志
- 山内 幸夫 山崎 悦孝
- 山崎 英明
- 山野辺富士雄
- 山本 祥之 山崎 悦孝
- 横田 稲光 吉川 宏
- 吉田 成村 吉田 良吉
- 和井田祐三 渡辺 登
- 渡邊 宏 渡辺 幸男

平成25年度 決算報告書

(平成25年4月1日～平成26年3月31日)

(単位：円)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	6,689,187		
終身会費 (24名)	960,000		
年度会費 (32名)	128,000		
総会会費 (2回478名)	2,390,000	総会費	4,481,620
总会寄付金 (本社ほか)	4,225,000	会報費 (年3回発行)	1,996,340
会報収入	272,500	供花費	348,525
協力会社寄付金 (23社)	1,380,000	会務費	3,461,350
その他寄付金	3,000	通信・事務用品・雑費	315,093
雑収入	1,853		
		次年度繰越金	5,446,612
計	16,049,540	計	16,049,540

平成二十五年度の決算を森下会計幹事が報告、満場の拍手で承認された。決算報告は次の通り。

決算報告を承認



箱島信一さん、村上吉男さん



(左)佐々木博志さん、中江利忠会長、花井尊さん



(左)香月浩之さん、後藤尚雄・常勤監査役、竹田純さん、粟田房穂さん



和井田祐三さん、野村彰男さん



荒井利尚さん、秋山康男さん



(左)安藤保雄さん、下村満子さん、田辺功さん



(左)寺田達雄さん、角田昌和さん、高山修一さん



(左)平野新介さん、内藤頼諒さん、石川喜代司さん



(左)五味秀雄さん、笹井輝雄さん、鈴木益民さん



(左)林莊祐さん、中江会長、細川淳一さん



(左)亀本泰夫さん、宇野勝己さん、松井茂さん、木村伊量社長、松本精次さん、小杉弘さん



秋山耿太郎さん、川島正英さん



(左)山内幸夫さん、栗原娑哉さん、渡辺幸男さん



(左)竹内實昭さん、大野功雄副会長、吉田良吉さん



(左)加納芳隆・管理本部法務部長、加納隆さん、加納安實さん



中島清成さん、秋庭武美さん



三宅勝喜さん、牧野信彦さん



(左)村田順一さん、徳江景英副会長、岡田和巳さん



(左)吉川宏さん、乾雄成さん、大島吉美さん、小松崎康次さん、服部豊男さん、豊田明さん



別府次郎さん、小松直さん



(左)山野辺富士雄さん、栗原娑哉さん、金子晃二さん



(左)金成英雄さん、内藤頼誼さん、村上紀子さん



(左)土田芳孝さん、滝下修さん、福地献一財務担当



加藤光雄さん、川瀬智長さん



中江利忠会長を囲んで元発送、印刷の仲間たち



岡田和巳さん、池辺史生さん



(左)堀越作治さん、片岡久明さん、高橋勝行さん、沢野正明さん、須田徹さん



桑折勇一さん、川戸弘次さん



(左)森田恭生さん、奥田信久さん、前原寛成さん



(左)小田川興さん、中島清成さん、西村陽一デジタル・国際担当、村野坦さん



洞口和夫さん、柴田真樹さん